

日本シェリング協会第32回大会 要旨集

2023年7月1日・2日（ハイブリッド）

対面会場

1日：大東文化大学・板橋キャンパス 3号館3-0111教室

2日：大東文化会館3階

オンライン会場 Zoom

I 一般研究発表

一般研究発表1 「ノヴァーリスとシェリング——哲学の根本構想をめぐって」 平井涼（東京大学・文学）

一般研究発表2 「自慰は自慰のまま何かを構成しうるのか——フリードリヒ・シュレーゲルによるゲーテとフィヒテの対比——」 長尾亮太郎（九州大学大学院博士後期課程・文学）

一般研究発表3 「ヘンリーケ・シュタールの多形的主体モデル (polymorphes Subjektmodell) の批判的検証」 小野寺賢一（大東文化大学・文学）

一般研究発表4 「Das Erhabene und das *wabi-sabi* / 崇高と侘び寂び」 フィリップ・ビュルギン Philippe Bürgin（州立シュトゥットガルト芸術大学博士課程・美学）

II 公開講演

「宇宙の弁神論的理解とその盛衰：アウグスティヌス、ライプニッツ、カント」 アダム・タカハシ（東洋大学）

III シンポジウム

シンポジウム「日本語からの哲学」

司会：浅沼光樹（立命館大学） シンポジウム趣意書

登壇者

「もう一つ別の声——『日本語からの哲学』から」 平尾昌宏（立命館大学）

「親密さのコードと手紙の文体——K. Ph. モーリッツの書簡論を中心に」

武田利勝（早稲田大学）

「フランス（語）からの日本（語）の哲学」 鈴木亘（東京大学）

I 一般研究発表

一般研究発表1 「ノヴァーリスとシェリング——哲学の根本構想をめぐって」

平井涼（東京大学・文学）

本発表が目指すのは、ノヴァーリスとシェリングを同時代の思想状況のなかに位置づけることで、初期観念論と初期ロマン派の関係を問い直すことである。

ノヴァーリスとシェリングには直接的な影響関係が存在する。1797年6月に執筆されたノヴァーリスの日記には、シェリングの『哲学の原理としての自我について』（以下『自我論』と略記）や『独断主義と批判主義に関する哲学的書簡』を読んだという記述が残されているし、『自然哲学に関する考案』（以下『考案』と略記）には本格的に取り組み、ノヴァーリスが自然の問題を考察するきっかけのひとつとなった。同年12月にはシェリングとの交友が開始され、98年に『宇宙霊について』（以下『宇宙霊』と略記）が公刊されると、この著作をも読破して、多くの抜書や批判的コメントを残したこともよく知られている。しかし、ノヴァーリスがシェリングの著作と取り組んだ事実を明確にたどることができるのはここまでで、それよりあとの著作をノヴァーリスが読んだかどうかは確実ではない。

そうすると、文献学的な根拠に基づかずには以下のように言えるだろう。ノヴァーリスは自我哲学期の著作も踏まえていたとはいえ、シェリングと真剣に対峙したのはもっぱら自然哲学期の著作をとおして、しかも、『考案』と『宇宙霊』の二著作をとおしてである。とはいえ、これらの著作に対するノヴァーリスの論評はきわめて断片的であるため、それを再構成するだけでは、両者の思想がどこで交叉し、どこで別れるのかをより本質的な次元から捉えることは不可能である。

そこで本発表では、より初期の段階にまで遡りながら、両者の理論的な枠組を客観的に比較してみたい。95/6年にノヴァーリスが執筆した『フィヒテ研究』は、シェリングの『自我論』と微妙に交叉する関係にある。さらに、『最近の哲学文献概観』から『考案』におけるシェリングの自然哲学への転回はノヴァーリスが自然の問題に取り組むためのきっかけとなり、98年に至ると、ノヴァーリスは精神と自然の同一性、分離、再統一という三段階論を基礎として、独自のエンチュクロペディー構想を打ち建てるに至った。この間における両者の理論的な枠組を再構成しながら、とりわけ哲学の根本構想をめぐって。その共通点と相違点を明らかにしてみたい。そのうえで、文献学的な根拠に基づいて両者の関係を確定する場合には、そうした考察をも適宜差し挟むことにしよう。

ノヴァーリスをも含めた初期ロマン派とシェリングの関係をめぐっては、以下の古典的な研究が存在する。Hinrich Knittermeyer: *Schelling und die romantische Schule*, München (Reinhardt) 1929. しかし、歴史批判版全集の刊行により、初期ロマン派をめぐる研究状況は根本的に刷新されている。にもかかわらず、現在の研究動向を踏まえて、ノヴァ

ーリスとシェリングを同時代の思想史のなかに定位した研究は数少ないのが現状である。わたしは本発表をこうした試みのための序論として位置づけてみたい。

一般研究発表2

「自慰は自慰のまま何かを構成しうるのかーフリードリヒ・シュレーゲルによるゲーテとフィヒテの対比ー」

長尾亮太郎（九州大学大学院博士後期課程・文学）

本発表は初期ロマン派フリードリヒ・シュレーゲルの批評文『ゲーテのマイスターについて』（1798年／以下『マイスター論』と略記）を、後年の『哲学の展開十二講』（1804-1805年）におけるフィヒテ批判に引き較べ、彼の目に映るゲーテとフィヒテの差異を浮かび上がらせる試みである。その際、約6年の隔たりのある両テキストを結び合わせるべく、間に位置する諸断章群や『超越論的哲学』（1800年）を適宜参照する。この試みでもって顕になる差異は、境目に立ち両者を眼差すシュレーゲルの構想に独自の輪郭を与えるだろう。以下にあらましを述べる。

『マイスター論』はゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1796年／以下『マイスター』と略記）への批評文である。ここでシュレーゲルは同小説の特異性として、各登場人物、ひいては彼らにまつわるエピソードの鋭い輪郭づけに着目する。それによって彼らは互いをはねつける自立性を表し、鮮やかな対照を描き出している。しかし諸部分のこうした対照性ゆえに、読者は全体の構成の核をなす詩人の意図の在り処をどこにも求めることができない。むしろ読み進めるほどに中心は曖昧になってゆく。その行き着く先で読者は諸部分のいずれかに比重を置き、自ら中心点を仮構するに至る。

フィヒテの思想はこれと真逆である。彼の言う自我は、シュレーゲルによると、自らの同一性の根拠を把握能力の及ばない外部、非-自我に委ねている。『マイスター』と同じく全体の中心が覆い隠されているのである。しかしフィヒテの自我は『マイスター』とは違い諸部分を持たず、したがって全体が画一的であり、中心を仮構しようにもそのための比重の置き所がどこにもない。

ところでシュレーゲルの目からすれば、両者の有り様はいずれも自己産出の母体を失った「自慰」に他ならない。1798年の遺稿断章において彼は「通常の哲学的分析は自慰によく似ている」と述べる。しかし後者が何も産み出さない自慰である一方、前者は見る者に自慰を催させる自慰である。ではシュレーゲルは…。結論は発表当日に委ねる。

一般研究発表 3

「ヘンリーケ・シュタールの多形的主体モデル (polymorphes Subjektmodell) の批判的検証」

小野寺賢一 (大東文化大学・文学)

抒情詩研究においてはしばしば作品が表現する主体の取り扱いが問題となる。長きにわたり、これを作者と区別するための概念として「抒情詩の〈私〉 (lyrisches Ich)」が用いられてきた。しかし当該概念は幾度もその有効性が疑問視され、1990年代中頃以降はこれを廃して別の概念を用いることが提案されるに至る。こうしたなか登場したのがナラトロジーを応用した審級理論である。審級理論ではテキストの発言主体である「話者 (Sprecher)」と「話者」の「背後」でその価値観や遠近法を規定しているとされる「抽象的な作者 (abstrakter Autor)」、そして「実在の作者 (realer Autor)」とが区別して論じられる。

DFG 学術ネットワーク「リュリコロジー (Lyrikologie)」(2016–2020)の主要な参加者たちは「抽象的な作者」やこれに類する概念に疑義を呈した。そして何らかの擬人化された主体概念を用いることじたいを批判し、「話者」の代わりに「発信源 (Adressant)」を用いることを提案したのである。「発信源」とは閉じられた統一体である言語記号群の配置や連続のうちにある、かつこれらの言語記号によって達成される文法的、様式的、修辭的、韻律的手法とともにある、プラグマティックな出発点の目印であるとされる。この「発信源」が作品の受容に際してプラクティカルな出発点である実在の作者と結びつけられたり、虚構の人物として表象されたりするというのである。これに対してスラヴ文学研究者ヘンリーケ・シュタール (トリーア) はハーラルト・シュヴェツァー (ベルンカステル＝コース) の協力のもと、ハインリヒ・バルトの実存哲学を用いて審級理論の各種主体概念を超越論的に基礎づけた。

本研究発表では以上の経緯を説明し、シュタールの理論の有効性について実例も用いて批判的に論じる。彼女が提案する多形的主体モデルは「実在の作者」、「話者」ならびに「抽象的な作者」、そして「抽象的な作者」の類似概念である「テキスト主体」の関係を体系的に理解するうえで役立つ。しかしあえて当該モデルについては各種主体概念を用いずとも、解釈に際して抒情詩と作者との関係を適切に処理することは可能である。そして何よりも彼女が前提とする主体と抒情詩とのきわめて強固な結びつきは、18世紀末から19世紀にかけてドイツで発展した観念論的ジャンル詩学によってはじめてもたらされたものなのである。こうした理由からシュタールのモデルの有効性は理論的にも歴史的にも限定的であると考えられる。

Das Erhabene und das *wabi-sabi* / 崇高と侘び寂び

フィリップ・ビュルギン Philippe Bürgin
(州立シュトゥットガルト芸術大学博士課程・美学)

Was haben die ästhetischen Kategorien des Erhabenen in der Tradition von Immanuel Kant sowie des *wabi-sabi*, wie man es in der Teezeremonie und im Trockengartenbau vorfinden kann, gemeinsam? Dieser Frage möchte sich der angedachte Vortrag auf Grundlage einer Gegenüberstellung eines Gemäldes von Barnett Newman mit dem Trockengarten des Ryōan-ji annehmen. Diese Gegenüberstellung geht von der Grundthese aus, dass sowohl in der modernen Kunst des Westens als auch in der traditionellen Kunst Japans sogenannte Strukturmomente des Erhabenen vorzufinden sind. Identifizieren lassen sich diese Strukturmomente, indem man die kantischen Momente des Erhabenen als Schablone nimmt, um anderweitige ästhetische Kategorien, wie *wabi-sabi*, als eine ästhetische Liminalitätserfahrung zu rekontextualisieren. Unter dem Begriff der Liminalitätserfahrung sollen ästhetische Erfahrungen untersucht werden, die sich (getreu des lateinischen Wortsinnes von *sublim*) zwar noch im Medium der sinnlichen Wahrnehmung befinden, aber doch erst *unter der Schwelle* des Darstellbaren ihre ästhetische Wirkung entfalten.

II 公開講演

「宇宙の弁神論的理解とその盛衰：アウグスティヌス、ライプニッツ、カント」

アダム・タカハシ（東洋大学）

いわゆる三つの「批判書」の執筆のあとに、イマヌエル・カントは「弁神論の哲学的試みの失敗」（1791）という短い文章を書いている。弁神論とは、世界における悪の遍在から神の知恵や正義を擁護する論説を意味する。この問題は、単なる「神学」の話に留まらない。というのも、西欧の知識人たちはおよそ十八世紀まで、世界の成りたちを説明する際に、神の関与や配慮にその根拠を求めていたからである。カントが論じているのは、そのような思考法が彼の時代においてもはや正当な世界認識とは言えないという事態であった。

本講演では、カントがその終焉を報告した世界の弁神論的な理解というものが、西欧世界においてどのように成立し、それが自然哲学的伝統ともかかわりながらいかなる展開を遂げたのか考察する。そもそも古代ギリシアのプラトンやアリストテレスにおいて、世界への神的摂理は議論の対象とはなっていなかった。だが、古代末期の解釈者たちを通して彼らの思想は弁神論的な文脈のもとで読み替えられていくことになる。この弁神論の理論的基盤を用意した最重要人物はキリスト教の神学者アウグスティヌスであり、彼の思想が様々な変奏を経ながら十八世紀初頭まで影響力を与えた。その近世における展開の頂点に位置したライプニッツからカントまで、わずか数十年の時間しか経っていないが、そこには大きな断絶があった。講演ではその歴史的経緯を概観しながら、最終的にはフィヒテやシェリングの哲学を「ポスト弁神論」の時代の思想として再考することを目的としたい。

III シンポジウム 日本語からの哲学

シンポジウム趣意書

浅沼光樹（立命館大学）

〈日本語からの哲学〉とはさしあたり平尾昌宏会員の近著のタイトルである。『日本語からの哲学』では「なぜ日本語の論文はくです・ます体で書かれてはならないのか」という一見トリヴィアルな問いを機縁として、〈です・ます〉体と〈である〉体の背後にある原理---それは〈人称が作りだす動的な構造〉であり、議論の枠組となりうる普遍性を備えている---にまでさかのぼりつつ、この原理に基づいて「正義」と「愛」を両極とする重層的な倫理的な世界観が提示されている。

しかし『日本語からの哲学』をシンポジウムで取り上げるのは、それが単に会員の著作だからではなく、むしろそれが「日本の哲学」の型の一つとなりうる可能性を秘めているからである。この型は、次の三点によって特徴づけられる。第一に、現代の日本において私たちが日常的に感じる（可能性のある）違和感が出発点とされている。第二に、この違和感が---理性と経験に基づく---オーソドックスな哲学的手法によって分析され、客観的妥当性を要求しうる結論が導き出されている。第三に、考察の手続きや内容の正当性とは別に、つねにその限界（哲学的抽象性）が意識され、諸学の具体的成果との対話の余地が意図的に残されている。要するに、ここでは現代日本の日常がそのまま哲学の舞台となり、その日常性と地域性を離れないまま同時に抽象的・普遍的でありうる考察が、哲学以外の諸学との連携の可能性を最初から拒絶してしまわない仕方で行われているのである。さらに、この考察が導き出す結論は広く「制度」「倫理」「哲学のスタイル」などの諸問題に関わり、こうした内容面からも、本書は私たちの議論の導き手となりうるだろう。

いずれにしても本書はいわゆる〈J 哲学〉の最良の成果の一つと言えるだろうが、それに触発される形で、本シンポジウムでは『日本語からの哲学』を一つの実例とするような〈日本語からの哲学〉の可能性とそれをめぐる諸問題について考察してみたい。

日本で哲学が根付かず、人々から離れているのは、哲学が西洋語とその翻訳に留まっているからではないか。和辻の「日本語で哲学せよ」との呼びかけに答え、こうした閉塞状況から脱しようと試みたのが、拙著『日本語からの哲学』（晶文社）である。

本書は基本的に入門書である。ふだんの講義相手、哲学を専門としない学生たちを念頭に、哲学概論や哲学史概説ではなく、自分たちで「哲学する」ことを学ぶための。哲学する一般的な方法は別書で示したが、本書では一歩進み、特定テーマに基づいて実際に「哲学する」様子を示そうとした。その際心がけたのは、(1) 身近なところから問題を発見することである。かつて〈です・ます〉で書いた論文を紀要に投稿したところ、文体を〈である〉に改めることを掲載条件とする査読意見が見ついたことがあった。この、ありふれた具体的な出来事から発する、「なぜ〈です・ます〉で論文を書いてはならないのか」問題（本書の副題）こそ本書の主筋であり、「日本語からの哲学」たる所以である。また、(2) 探求に当たっては、初学者を念頭におき、特別な技法を用いず、かつ、悪しき意味での思弁に陥らぬよう、我々自身の経験と科学的な知見を素材に、健全な推論（ドイツ観念論者なら「通俗悟性」とでも呼ぼうか）で議論を進めるよう努めた。

そのため、前半部は国語学、日本語学の議論の紹介と再検討に費やされるが、後半では、〈です・ます体〉と〈である体〉が単なる文体ではなく、哲学的とも言える原理たり得ることが自ずと明らかになる。即ち、〈である体〉とは一人称が三人称を対象として記述する文体であり、他方、〈です・ます体〉は一人称の書き手が二人称に向けて語りかける、つまり、この二つの文体はそれぞれ、「二人称の他者が存在しない世界」と「わたしとあなたとの世界」とを現出させるからである。

この二項図式は（ただし、本書最後半ではさらに展開されて四項図式となるが）、図式的、抽象的なだけに応用範囲は広い。

〈である〉——記述：独話：科学：正義：制度

〈です・ます〉——呼応：対話：哲学：愛、ケア：生成

今回、シンポジウムという得がたい機会に、更なる展開を期したい。

親密さのコードと手紙の文体——K. Ph. モーリッツの書簡論を中心に

武田利勝（早稲田大学）

本報告は、文学研究の立場から、『日本語からの哲学』の指し示す問題圏への接近を試みるものである。具体的には、ある種の社会性によって無自覚に要求される制度が、翻って、社会的存在としての個人に対していかなる文体を要求するかという問題、端的に「文体の制度化」ともいうべき問題をめぐって、舞台を近現代日本から18世紀後半のドイツ語圏へと移しつつ、検討を加えてみたい。

近代市民社会の成立期にあたる18世紀ドイツ語圏が同時に「友情の世紀」でもあったことはよく知られている。封建時代における垂直性の社会構造が揺らぐ中、身分や地域の垣根を超えて、敬虔主義・啓蒙主義・疾風怒濤の名のもとに、友情のネットワークは水平方向へと広がってゆく。その広がりには前代未聞の「書簡文化」の隆盛へと結実し、このことは数多の「書簡文例集 (Briefsteller)」の需要を促した。とりわけ、Ch. グラートが1751年に出版したそれは、「書簡における良き趣味についての実践論」と題された論考も併せて、18世紀後半の親密な書簡文体の性格と形式を決定づけるものとなった。こうした背景とともに、親密さというコードが形成されてゆく。そうしたなか、K. Ph. モーリッツもまた二つの「書簡文例集」を世に出したのだった（1783年および1793年）。

本報告では、まずは18世紀後半に進行する親密さの制度化のあらましを概観、そこからモーリッツ上記著作における文体論へと目を移した後、彼の議論が制度化された文体にいかなる揺さぶりをかけるのか、そしてそれは続く時代への、あるいはロマン主義的文体への萌芽と見なし得るのかを考察する。

フランス（語）からの日本（語）の哲学

鈴木亘（東京大学）

『日本語からの哲学』では、〈です・ます体〉が二人称の読者、規範的学術論文の書き手である「我々」に回収されない他者の存在を措定すること、それゆえに一人称複数の共同主観を前提とする学術論文の制度と相容れないこと、しかし他方で、まさにそのためにこそ、論文という場に問いの（単なる解決ではなく）生成という新たな契機をもたらしうるということが指摘されている。本発表ではこれを踏まえつつ、いわゆるフランス現代思想の文脈から、論文制度における他者性の導入（他者はフランス現代思想お得意のテーマである）とその創造的意義について検討する。

知られるように、言語学者エミール・バンヴェニストは『一般言語学の諸問題』において、語り手と聞き手のコミュニケーションモデルに基づく「ディスクール」と、出来事それ自身が語るかのような「イストワール」という、言表行為をめぐる対概念を提起した。これを含め、フランスにおいてはロラン・バルトやモーリス・ブランショなど、非人称的エクリチュールに関する議論の系譜が存在する。本発表ではまずこれらの検討を通じ、論文における単なる一人称複数ではない〈である体〉、他者性を否認しない〈である体〉がいかにして可能かを論じる。

次に、哲学的テキストにおける自由間接話法の使用が、〈です・ます体〉とは異なる仕方で、テキストに他者性を導入することを見る。取り上げるのはジル・ドゥルーズとジャック・ランシエールである。それらのテキストは自由間接話法によって引用者と被引用者の区別を曖昧化させ、哲学的議論にいわば他者の声を混ぜ合わせる。それを通じ、一方では文体的側面から哲学の可能性が拡張され、他方では哲学論文の制度の規範性や、哲学者という地位の特権性が相対化される。

最後に、フランス語（あるいは印欧語）をベースとしたここまでの議論が、日本語による哲学、ひいては哲学一般にいかなる知見を与えるかを問う。